



しらずもり

# 不知森の殺人

## 浅見光彦シリーズ番外

イラスト：zunko



『孤道 完結編 金色の眠り』の著者・和久井清水氏による、浅見家の先祖・元彦が活躍する内田康夫財団公認のミステリー。『平家谷殺人事件』に続く第2弾がついに発売！

6月11日  
光文社文庫で  
発売！



### 内田紫堂 Shido Uchida

帝国大学に籍を置きながら文士（小説家）を目指す元彦の友人・24歳。元彦に高い推理力を見出して以降、探偵としての仕事をいくつか紹介し、あわよくば彼の活躍をモデルにした探偵小説を書こうとしている。社交性が高く、ぐいぐいと人から話を聞き出す能力に長けている。



### 浅見元彦 Motohiko Asami

銀座煉瓦街の下宿に住まう本作の主人公・24歳。代言人（弁護士）志望だったが試験に落ち、将来の道を決めあぐねている。紫堂の持ち込むいくつかの仕事をこなし周囲からは「職業・探偵」と認識されてきた。細かいことを気にしがちな性格ではあるが、高い推理力を有している。

浅見は不知森の中をのぞいた。柵に手を掛け、わずかに身を乗り出しただけで、忌まわしい暗闇に捕らわれたような心持ちになる。黒い木々から垂れ下がるツタは、浅見を誘うように今にも手招きをしそうだった。

『不知森の殺人』

### あらすじ

時は明治。浅見元彦は、高知の緒智村で事件に関わったこと（シリーズ第1弾『平家谷殺人事件』参照）をきっかけに探偵としていくつかの依頼をこなすようになっていた。そんな元彦に、下宿の主人の娘であるおスミが「神隠しにあった友人を探してほしい」と依頼を持ちかける。友人の内田紫堂と共に行徳町へと捜査に向かった元彦だったが、「神隠し」の手掛かりを握る人物が彼らと会った日の夜、「入ったら出られなくなる」と伝えられる不知森で殺害されてしまった。二つの事件は森の祟りなのか？ 元彦と紫堂の名コンビが辿り着く真相とは？

### 「不知森」とは

タイトルにある「不知森」とは、現在「八幡の藪知らず」として知られる千葉県の禁足地のこと。立ち入ったものは二度と出ることができないとされている。元彦の子孫である浅見光彦もまた、『中央構造帯』にて「八幡の藪知らず」で発生した事件の捜査のためこの地を訪れていた。

### 時代の描写

多くの時事問題や、実際に発生した事件を描いてきた浅見光彦シリーズ。その番外編にあたる今作でもまた、その時代に起きた事件や出来事が、作中に大きな影響を与えている。政治的な動乱、貧しい農村部での「口減らし」など、様々な時代的背景が今作の事件を彩っている。

——それにしても、暗い寂しい森である。遠くから眺めると、霧のように立ち込める陰鬱な気配を、周囲の街に漂わせている。真つ昼間でなければ、臆病な浅見としては、あまり近づくと気にはなれないだろう。

『中央構造帯』